

## 書 評

岩鼻 通明 著：

『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』

名著出版 1992年2月

B5判 265ページ 5,900円

出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）は、日本列島の山岳信仰（修験道）の勢力圏を大峰山・英彦山と共に三分する東北地方最大の拠点として著名であり、宗教儀礼の古態をよく継承していることから、宗教学・民俗学の分野ではすでに詳細な研究業績がある。しかし、宗教集落・信仰圏・参詣路などの山岳信仰に関する中核的要素を、すべて系統的・時空的に分析したのは本書が初めてであり、山岳信仰研究に歴史地理学的アプローチがきわめて有効であることを実証しており、学際的にも本書が注目されている所以である。

内容構成は「序章 出羽三山の山岳信仰」「第1章 宗教集落——聖と俗の境」「第2章 即身仏——ホトケになったヒト」「第3章 信仰圏——山と里の交流」「第4章 道中記——旅のなかの信仰」「あとがき」からなっている。これらは著者が京都大学大学院の修士論文からスタートし、地理学評論、人文地理、史林、歴史地理学、村山民俗など諸雑誌に発表した17編の論文の集成であり、10年余にわたって累積された出羽三山研究の成果である。

「第1章 宗教集落」では、出羽三山の八方七口とよばれる登山口に発達した7つの宗教集落について、従来は同一時空的に認識されていたものを、(1)近世再編型（手向・岩根沢）、(2)近世成立型（大井沢・本導寺・大綱・七五三掛）、(3)未成熟型（肘折）に分類し、集落景観・社会構造・機能の点で次のような明確な相違点のあることを指摘している。

すなわち、(1)は中世起源で登拝に好位置を占め、天台系の修験集団を中心に最も大規模な門前集落として発達した。広域の信仰圏（東北・関東）をもち、中世以来の国郡鄉村単位の震・檀那場を確保し、現在に至るまで多くの登拝者を吸収している。

(2)は民衆の社寺参詣が盛んとなった近世に成立した真言系修験の集落であるが、百姓家が宿坊化・先達化したため宗教集落的景観に乏しい。信仰圏は近世に開拓した会津と関東で、各坊家の檀那は村々に交錯している。そして明治以後は衰退して、一般の

山村農家に還元している。

(3)は羽黒派修験（天台）の末派で信仰圏は新庄領内に限られ、登拝者も少なく門前集落として成長しないまま、明治以後は衰退し、現在は小さな温泉集落となっている。

「第2章 即身仏」では、日本の即身仏の大部分が山形県内にあるという独特の風土に根ざしたミイラについて述べている。このような信仰対象を民俗地理・歴史地理の課題として論文にするのは大変むずかしいことであろう。本書の論題とスムーズに整合しない感じを持った部分であるが、対象が特異なためか、内容的には興味を持てる。

著者は即身仏が三山の表駈け（手向→羽黒山→月山→湯殿山→大綱）の下り道者の多い大綱・七五三掛にあることに注目し、明治維新の神仏分離により湯殿山の司祭権を出羽三山神社に取られたことや、元来この2集落の檀那場は狭かったため、経済的基盤の脆弱性から、信仰を引きつけるセールスポイントとして即身仏信仰を喧伝したのではないか。また湯殿山行人碑の分布と年号から、ほとんどの石碑は即身仏となる生前に建てられたものであることから、本来は生身の行人に対する信仰が先行していることなどを指摘している。

「第3章 信仰圏」では、出羽三山を信仰対象とする講や、出羽三山神社の末社、出羽三山碑の分布によって、東北・関東・信越地方に広がる信仰圏を明らかにしている。しかし、著者は単に分布や伝播過程の考察では満足していない。信仰中心地からの視点ばかりではなく、信仰を受容している地域側の地域構造の考察が必要であるとした視点は新鮮である。

具体的には、出羽三山講を民俗誌および地方史誌類から収集したものに、著者の現地調査による事例を補強して、東北・関東・信越の信仰圏内から県別に合計107の事例を取り上げている。その結果、マクロにみれば出羽三山を中心とする1次～3次の圏構造をなすという。すなわち1次信仰圏は出羽三山から半径50km以内の主として山形県内で、13～15歳に初参りする村落共同体による成人式儀礼と合致している。2次信仰圏は半径50～150kmの地域で、戸主層を主とする成年層による代参講の信仰形態をなす。そして3次信仰圏は半径150～300kmで、同行仲間型

の講による老年層の参詣が主になるという。

また、出羽三山の分霊は2次と3次信仰圏の境界域に多く勧請されており、毎年の代参が困難な場合はこの分霊に参詣しているという。つまり信仰圏内の人々にとって出羽三山参りの意義は、成人式・青年層・老人層へのイニシエーションとしての機能を果たしているとしている。このような信仰圏の構造的な分析は、出羽三山のみならず、大峰山をはじめ全国の諸霊山の信仰圏についても対比してみる価値のある提起ではなかろうか。

「第4章 道中記」では、東日本の各県に所在する約150点に及ぶ、近世を主に近代を含む出羽三山登拝の記録に基づいて、特に遠距離からの参詣モデルルートの抽出を試みている。その結果、参詣の旅は「日常生活を離れて未知の非日常世界を常に求めて循環する巡礼と同じ」であり、「聖なる円環の旅」としている。

また著者はこの循環路形成の背景を、近世に社寺参詣の大衆化や名所図会・道中記などが整って、先達に頼らずに旅することが可能となった物見遊山的な巡歴を強調する解釈には批判的で、必ずしも自己の自由意志による旅ではなく、信仰共同体としての講を基盤としていることから、信仰の旅としての意義を重視している。

すなわち、ムラビトが参詣を通じてマレビトとなって境迎えされ、再びムラビトに戻ることや、聖と俗とが表裏一体となっているメービウスの輪(帯)理論などを例にして、民俗地理的思考がなされている。

そして東北地方北部からの出羽三山参詣は、農閑期の冬に行われるため、積雪の深い月山・湯殿山を除いて羽黒山に集中し、しかも伊勢西国巡礼の途中に立ち寄ることを図示している。それに対して関東・東北地方南部からの場合は、夏期に出羽三山を主目的とした参詣であり、特に関東からの場合は、善光寺・越後・出羽三山・金華山・日光などの大回行ルートをとる特徴を図示している。

このように信仰圏内からの参詣ルートにも地域による特性のあることなど、従来は同一次元で見られがちであったものを、一步踏み込んで明らかにした点を評価したい。そして多数の庶民の参詣日記から得た著者の循環路理論、すなわち出発から帰村まで同じルートを通らない参詣ルートの特徴が、他の霊山参りの場合にも適合するかどうか、関心と興味のもたれるところである。

以上は著書の内容を網羅したわけではなく、評者が関心を持ったところを述べさせていただいた。最後に全体として感じたことは、あとがきで著者も認識されているように、個々の論文をほとんどそのまま集成したため、書名に即した一貫性の途切れる部分がある。各論文の連繋を補足すれば、さらに説得力が強まるのではないかと思われる。ともあれ、本書は全国に分布する諸霊山の代表格である出羽三山を対象としたことから、山岳信仰研究に対して歴史地理的アプローチを試みる場合の指標となる貴重な研究成果といえる。

(長野 覺)